

専修大学の歴史・日本近現代史のなかの専修大学

「専修大学体育の歴史とその意義」

～専修大学における戦後の体育教育の歴史～

資料を見ながらゆっくり話をしていきたいと思います。必ずしも全部話されないと思いますが、専修大学の中での出来事を考えながら、一般体育をどのように専修大学が育ててきたか、また他の大学の動きとの関連なども含めて、専修大学が今後どうあるべきかを話していきたいと思います。

社会事情が随分変わったこともありまして、専修大学そのものも変わり、授業のやり方も変わってきました。

資料1を見てもらいたいと思います。これは専修大学に体育の教員として入った人達が、どういう時代からどの年代にいたかというグラフです。これを見ながら全体の話をお願いしたいと思います。

□専修大学の開学

専修大学は130年という歴史がありますが、



戦前、それから明治、大正の時は、本当に学生が非常に少なく、夜学を中心とした大学でした。それが今みたいに大きくなるのは予測もしませんでした。

終戦後、GHQの教育委員会が他の国の大学とはこうあるべきだという学校制度を作って、それを日本でもやるべきだとのことでいろんな改革が行われました。その結果昭和23年に新制大学として新しい形ができました。専修大学はその頃、大学としてはある程度形は整っていましたが、学生も少なく校舎も神田にある小さな校舎だけでした。しかし戦後、新制大学制度が発足した時、昭和23年に認可され、昭和24年から新しい学校制度の下に大学が始まりました。その時、国立大学は別として、慶応、早稲田、法政、中央など同時期に新制大学として発足しましたが、専修大学も認可は他の大学とだいたい一緒になったわけです。ただ問題なのは、今の神保町の神田校舎の場所で、人数をそれほど収容できませんでした。

□生田キャンパスの開校と専大スポーツの躍進

それを昭和23年に現在の生田の場所を買って、校舎と運動する施設を作るようになりました。元々は日本電気の研究所があった場所でした。ただ、そのまますぐに出来たわけではなく、最初にできたのは野球場です。

大正13（1925）年に東京六大学というリーグ戦が出来ましたが、その後10年後に五大学リーグという、今の東都大学リーグの前身が出来ました。五大学リーグは日大、中央、農大、國學院、それと専修の5つです。そのうち他の大学も参加したいということになりましたが、六大学リーグでは参加させてもらえませんでした。今でもそうですが六大学リーグは東大、早稲田、慶応、法政、立教、明治の6つが自分たちのグループを作りました。それに対して、東都大学は他の大学も入れて、今では7部まであるような形になっています。発足の頃は五大学で十分でそれ以上増える可能性もなく、そのまま五大学リーグということでやっていました。専修大学は決して弱い方ではないのですが、戦前は10年に五大学リーグで優勝して、戦後は東都大学リーグとしては最も多い優勝回数を重ねました。

その他のスポーツでは、六大学やもう少し大きな大学の運動部に比べたら少し地味ですけど、カヌーとかボクシングなどでベルリンオリンピックに出たという記録もあります。戦後はスケート、卓球、ボクシング、野球などが強かったようです。そういう時代もありましたが、結果としてスポーツの歴史ということでは専修大学は確かにある面、強い部分もあったのですが、他の大学に比べて決してスポーツは表面に出ていませんでした。何をやってたかと言うと、夜学の経済と法学、現在の商経学部という形で今の経済学部と同じようなことをやっていました。戦後商経学部は残りましたが、商経学部と法科という形で専修大学はずっとやってきました。昭和23年に学制改革された時に、日本の大学でキャンパスと言えるようなところは国立大学だけでした。

□新制大学制度のもとでの体育

東大は今でも広大な校舎を持っていますし、他の地方の帝国大学、それから戦後新制大学になった各県の国立大学、これはみんな大きな校舎といえるものを持っていました。しかし慶応をはじめ早稲田、立教、明治、中央みんなほとんどキャンパスと言えるほどのものを持っていない。それでは学生が運動したい、身体を動かしたいという場合に場所がないのです。それで新制大学になった時に、体育を必修にしたかどうかという話になりまして、4単位必修でスタートしました。それで教養課程というものを作りまして、社会、人文、自然というのを12単位、要するに3科目ずつ取ります。それから語学が8単位、体育が4単位で48単位というのがその頃の教養科目の必修単位となります。

なぜそのようにしたかと言うと、キャンパスがほとんど建物だけで、学生が運動するような場所が無い。それでは広い場所を確保してそこで学生に運動させよう。そのためにはどうしたら良いかと言うことで、体育を必修にしました。各大学が自分たちの元々ある校舎の他に、第二校舎という形で地方に場所を求めました。例えば慶応だったら日吉、早稲田、明治は所沢というように、いろんなところに土地を買ってそこで体育を履修せせるという形になりました。

専修大学もこの生田の土地を買ったわけですから。それで最初に作ったのは野球場でしたが、その他にラグビー場など、とにかく土地があってそこが赤土のまま残っていて、そこでサッカーやラグビー、他の球技をやったり、野球場では野球の授業をやったり、その他にバレーボールコートが今の北グラウンドの辺りにありました。そういう形でとにかく体育の授業を始めました。

□体育必修化の創始期

その時、新制大学が出来た次の年の昭和24年度には、必修の単位のために大行先生と言って、千葉大学の医学部を出た先生が、保健体育理論ということで呼ばれてきたのが体育最初の人事でした。それが専修大学の体育の始まりです。その後いろいろな先生が入ってきましたが、大行先生は昭和42年まで法学部でずっと在職し、神田校舎の一番大きな教室で学生を教えていたのを覚えています。年取っても童顔で、良い先生だったのを覚えています。

昭和24年には同じように、紅林康という先生が、保健体育の理論を教えるために入っていただきました。その先生もやはり千葉医大からきたわけですが、その二人で始めました。ところが実技をやりようがないわけです。グラウンドは少しありますが先生がいない。そこで何をやったかという、体操の先生を呼んで広場でデンマーク体操をやったという記録が残っています。これは山崎康平という先生でしたが、この先生はすぐに辞めました。とても生田の場所ではやっていられないとのことでした。要するにスポーツをやる施設ではなかったのです。そこで1年で辞めたのですが、25年度にはそれではいけないということで、17名という非常に多くの専修大学のOBを呼んできました。年はまちまちで一番上の人は30歳ぐらいですが、大体卒業したての人達でスポーツの得意な学生もしくはキャプテン、そういう人を呼んでそのまま体育の授業を、何曜日の何時間目は何の授業があるよというように時間帯を決めてやっていました。

カリキュラムはまだきちんと決まっていなかったのも、学生が集まったらその種目をやるという形で十分間に合っていました。数で言うと24年は全体でも330名しかいませんし、25

年は216名しか入っていない。こういうような時代で、ほとんど受験者と入学者の数が変わらなかった時代でした。だから逆に言えばこういう形でも授業らしいものが出来たのです。

ただここで見てもらうと分かりますけれど、最初の長瀬精二という人は、堀口理事長の下に専務理事までやった人です。結局体育実技の助手をやってその後、専修大学の事務に残って最終的には専務理事までやりました。もう一人バスケットを教えた中江純詮さんという人も、少し時代は変わりますが専務理事までやりました。こういう人たちが事務に入ったわけです。僕が覚えているのはもう一人玉野譲先生というラグビーを教えた先生がいますが、その先生もまた事務職に残って、昭和33年から37年までは体育課長をやり、自分も実技を教えたりしていた時代もありました。そういう人が最初の体育実技の専任の助手として授業を行っていました。

それで26年になった時に、山崎康平先生が辞めてデンマーク体操を教える人がいなくなったので、紅林武男先生が入ってきました。

この先生は、戦前からある日本の体操競技の草分けの研究所である、三橋体操研究所の出身で、大学は出ていないのですが、文部科学省の体育訓練所というところを出て、体育の教師の資格を取った人です。

その後NHKのラジオ体操の先生になり、ラジオ体操第一、第二をずっとNHKで教えていた人です。その後NHKがテレビになった時も最初の頃は紅林武男先生がテレビ体操をやっていたのを覚えています。非常に優秀な先生で、あまり運動をしたくない人間でも紅林先生にかかると思わず身体を動かして、全員が実に上手くコントロールされて徒手体操をやってしまうのを僕らは感心して見ていたことを

覚えています。

結果として昭和28年にですが、体育実技の水沼先生が入ってきました。水沼先生は最初副手として入職したわけですが、2年前から事務職として入っていたという話です。水沼先生は陸上、特に駅伝の選手でした。大学駅伝では昭和14年にたった1回だけ箱根駅伝で専修大学が優勝しています。その後ずっと一度もありませんので唯一の記録です。水沼先生は事務職として入りましたが、駅伝の非常にレベルの高い優秀な人だということで体育の副手となり、今までは大行先生、紅林康先生、紅林武男先生しかいませんでしたが、水沼先生が加わりました。29年度には教育大学の太田三四郎という主任教授の下に人を選んで、大石三四郎、太田義一、竹内利貞の3人の先生が非常勤講師に入ってきました。それとは別に、鶴岡晴明という剣道七段の人が、剣道の指導者として専修大学に入ってきました。

□体育教員の増員と授業の充実

このように少しずつ教員を増やして、しかも専門種目を学生に教えられるような態勢を作ったのですが、未だに専任助手である運動部の卒業生が授業をやっていました。その後大学が少しずつ大学らしくなり、昭和37年には受験生が2,000人を超えました。受験生が20,000人を超えたということは、その頃の大学としては非常に大変なことでした。

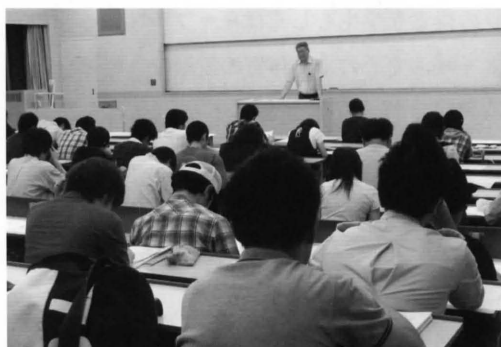
その時初めて人を入れるようになり、30年度には水沼先生が今度は体育講師として専任になり、31年には山本久之武先生、小宮先生のお二人が入ってきてスタッフがやっと7人になりました。7人がそれぞれの専門を見る形でいい、その他に専任助手の方々に実技をそれぞれ受け持ってもらい、32年にはその他に、

野球の栗山渡先生、玉野先生はラグビーの他にいろいろなことをやっておりました。

33年になると、もう一人清水瑞秋という教育大でラグビーのキャプテンだった人が入ってきました。非常にレベルの高いラグビーを教えていて、専修大学のラグビー部の元を作ったと言われています。また、ここに書いてあるように、佐伯紀樊子と言う人のですが、女子の先生が非常勤として入っていたのは確かなのです。

専修大学が女子の学生を入れようとしていましたが、なかなか難しくて最初の24年には338名で女性2人です。それからその次の年は3人、その次の年は8人、それから6人、4人です。例えば昭和28年度などは700人いるうちの女性4人、29年度は800人もいて7人、いかに専修大学は女性が少なかったかが分かります。それでも女子の授業をやろうとして、女性の先生を入れたのはそれなりの努力をしていたわけです。その後、昭和30年に宮川ムツという男子の先生が入りました。この人は東京芸大から呼ばれて、女性のダンスを教えるということでしたが、学生がいないのであまり教えられなかったのを覚えています。

その後だんだんと態勢が出来上がってきて、32年には受験生が3,000人を超え、34年には4,000人、少しずつ学生が増えていき、この頃から専任助手の人達はやめていきました。それで完全に非常勤の先生と専任で体育の授業



をやるようになりました。昭和36年にまた渡部崋生という先生、37年には自分の名前が書いてありますけど、長島、鳥倉鶴久の二人が入りました。この時初めて専任が10名を超えてある程度専任中心の授業ができるようになりました。

専任中心になったために、今度はその時期の要望であった冬のシーズンコース、スキーとかスケート、もしくはキャンプとか水泳とかができるようになりました。それまでは専任が少なかったの、シーズンコースへ一週間学生を連れて行くことがなかなか出来ませんでした、やっとこの時期からそれぞれの専門にわたってシーズンコースが出来るようになりました。

人数もこの表にあるように年々増えていくのですが、とぎれる時があるわけです。しかも長くいる人と、短い人がいますが、短い人のほとんどは他の大学（ほとんどが教育大学）を定年になった人です。そういう事を何のためやり始めたかという、これが専修大学の一番体育を第一に考える時期であって、37年、38年の頃から専門の学部を作ろうじゃないかという動きが少しずつ出てきました。

□体育学部創設の検討

体育学部は42年頃に実現するのではないかという話になってきました。42年とは何かと言いますと、42年から今村嘉雄という教育大学の体育学部の学部長をやった人が専修大学へ移ってきました。

その時に今村先生に続いて今村先生の弟子の清水重男という人も入ってきました。今村先生は、体育史の日本の草分けです。それから清水重男先生はやはり西洋体育史で、どちらかというと日本よりフランスで有名な方です。

それから小林晃夫先生は体育心理を教育大

学で教えていた人です。この先生は内田クレペリンといって、心理学のクレペリン検査の大家で、心理学の中では非常に有名な人です。

阿久津先生はその時期に入ってきました。阿久津先生は杉靖三郎先生の弟子で、杉靖三郎先生は東大の医学部を出て、教育大学で生理学を教えていた先生です。杉先生は若い時にカナダのストレス研究所のハンス・セリエの下でストレス学説を研究して、日本へストレス学説というものを持ってきた人です。その人は、ここには書いてありません。何故かという体育の先生ではなくて、生理学の先生として専修大学に入ってきたからです。

それから江尻容先生は教育大学で体育管理学の主任教授だった人です。前川峯雄先生は体育原理の先生です。前川先生は、47年か48年頃に専修大学に体育学部ができないと決まった時にいち早く中京大学の体育学部を作るために退職しました。

坂井田逸治先生は東京オリンピックの時の事務局長をやり、最終的には新宿高校の校長で定年を迎えた人です。こういうように非常な陣容をここで集めていました。今村、清水、小林、阿久津、江尻、前川、坂井田とこれだけの人材を専任として取っているわけです。それは何故かと言うと、森口理事長が専修大学に体育学部を作ろうと考えていたからです。それが何故無くなったかと言うことは残念ですが分かりません。

その時に、ここにいる7人、8人の他にも杉靖三郎先生や田中義彦先生も専任で呼んでありました。田中義彦先生は田中教育研究所の所長で、教育大学で体育学部の生理学を教えていた人です。これは、専修大学の専任は若い人ばかりでしたので、それではとても一つの学部を作る時には十分ではないと判断し、文部科学省に対する手当としてもそれだけの人材を呼ん

で、かなりの意気込みを示していました。

もしその時に作ってあれば、専門の日本体育大学とか順天堂大学とは別として、東海大学と同じような時期に専修大学にも体育学部が出来たはずでしたが残念でした。

その後、体育の専任の先生をこれだけ集めておいて、何もやらないのはもったいないということで、社会体育研究所という、社研とか人文研とかいろいろな研究所と同じような形で研究所というのを作って、今でも体育の先生方が活躍する中心となって研究活動をしています。この時期一番多い時は、体育の専任が19人、出入りしたこともあって20人近い専任の体育の先生がいました。20人いるということは十分学部が出来る人数だったわけですが、出来ないことになりました。

□研究環境の整備

もう一つこれは今の保健体育部会の話なのですが、専修大学はいわゆるコマ数が決まっています。ところが33年～35年の専任はいくつ持っているかと言うと、11か12、若い人は16ぐらい持っていたという記録があります。僕がきた時は13ぐらい持たされましたが、そのコマ数というのは大学においては非常に問題があることです。

それが結果として決まったのは、専門が6、外国語が7、体育だけが8、こういう過程がありました。それがいつ出来たかは不確かですが、出来ないところもありますが、多分33年か35年だと思います。

あまりにも授業数が多すぎて、昭和43年に組合が教員で体育と外国語だけを差別するのはおかしいという形で交渉した結果として、昭和43年に専門5、外国語6、体育7という形に変わりました。それでもまだ、外国語と体育

は差別されていましたが、その後随分長い間組合が頑張ったのですが、結果として30年以上経ってからやっと全科目、全教員持ちコマ数が5という結果になりました。これはなぜここに入れるかという、とてつもない教員が持ちコマを差別されていたということと、他の大学と比べて非常に持ちコマが多い。持ちコマが多いということは、それだけ教育の力が分散されるわけです。だから何とか少なくして集中して出来るようにしたいということで、結局全員が5コマになったのは、まだ5、6年前、きちんと決まってから6年しか経ってないのが現実です。ということはずっと専修大学は外国語の教員と体育の教員については差をつけていたということです。教員に対するコマ数の問題は、いろんな所で問題になっています。ただ多くの大学は今、コマ数4になっています。それも4になるまでにはそれぞれの大学がいろいろな交渉の結果だと思いますが、それで今があるのです。大学の教員とはどういう授業をやればいいのかは人によって違いますが、如何に学生を育てるかと共に、自分も育てていかなければいけないのです。持ちコマが多いと言うことは、それだけ自分の時間が無いということで、非常に問題になってきます。専修大学はやっと平成14年から人並みになったのではないかと言われています。専修大学では体育学部が出来なかったのですが、その後何回かスポーツに関する学科を作ろうとしている動きがあります。だけど上手くいきませんでした。

□大学設置基準の大綱化と身体教育

もう一つ話がありますが、大学は平成3年に大綱化という文科省の指示によって、大学の教育のカリキュラムの見直しをしようとしたわけです。ところが日本というのは教育行政という

のはほとんど変わらない。学制で6、3、3、4という形を作って、日本の教育をある程度日本の考えではなくてGHQ、ようするに戦勝国、アメリカ、フランス、イギリス、中国、ロシア、その国の代表が集まって日本の教育はこういようにするのだと決めたのが、昭和23年新制大学を作った時です。

ところがそのまんま、ほとんど未だに変わっていません。何故かと言えば、教育行政というものに対する意識、大学を変えようとか、大学はどうしたら良いのかという意識がほとんどなくて、文科省、もしくは国が大学の教育制度をどうしたらいいかというのをほとんど考えていない。なぜかと言えば、あまりお金にもならないし、選挙の票にもならない部分に、努力しないのが大体日本の制度ですから、結果として教育というのはほっとかれています。

今一番問題になっているのは、皆さんも少し記憶にあると思いますが幼児教育です。幼稚園は3歳～5歳の教育をする場ですが、その幼稚園は文科省が管轄、ところが保育所という施設があって、やっていることは幼稚園と変わりませんが、そこは厚生労働省が管轄。今大学教育もいろいろな形で、問題になっていますが、世界では幼児教育をどうするかということが非常に話題になっています。なぜかと言えば、昔から言われている人間の感性とか、リズム感とか、それからいろいろな反応。そういうものは大体3歳～5歳くらいの時期に脳が動いて大体決まってしまうと言われてしています。

日本は英才教育が結構盛んなのです。例えばバイオリンの英才教育というのは世界で有名で、3歳児からもう非常に難しい楽曲を弾かせるようなことがあって、だから時々とんでもない天才が出るのです。しかし同じように他の部分では、3歳～5歳という時に文科省は幼稚園

だ、厚生労働省は保育所だとやっているのは、ほとんど幼児教育について考えていないということなのです。

それを何とかしなければいけないというのは、今日の話題とは少し違いますけど、ともかく教育行政というのをほとんど変えていない。たった一回だけ何らかの形で教育行政を動かそうとしたのが、平成3年の大学の大綱化という文科省から出た指示なのです。



□大綱化と教養教育

大綱化とは何かと言うと、要するに専門も教養もそれから外国語も、どういう授業をやるかは大学自身が自分たちの主張する意見に基づいて決めなさい。どういう教育をやるかは大学独自在決めて、しかも学生に最も良い方法を検討して、自分たちのカリキュラムを作りなさいということを言い出しました。

ところが大綱化という言葉そのものも曖昧だし、文科省がやろうとするのは何なのか、どういうことをしたいのかということを、文言に

はあるのですが良く意味がつかめない。自分たちの教育を自分たちでコントロールするような形でカリキュラムを作れということで、国立も、私立も小さな短大も大学が全部動きました。

この大綱化というので一番動いたのは、いわゆる大学の中で「パンキョウ」と言われていた一般教養のことで、あなたがたも少しそういう気持があると思いますが、専門に対して教養という意識、それはずっと昔からあって一般教養というのはあまり勉強しないで楽に取れるということで、大学の中でごく軽く見られていました。

これをどうするかというのをまず第1に、一番大きな変化は必修から外すということです。人文、社会、自然科学という3つの基本的な教養の科目の必修単位を少なくする。それから語学、外国語も必修から外す。体育は一番早くから無くすのではないかとということで、体育も外される形になる大学が多数あったわけです。

専修大学はその頃、最初に問題視されたのは、単位数なのです。だいたい今124単位から、文学部は138単位なんてところもありますけど、その頃の総単位数は大体そのくらいでした。その中の48単位というのは、専門の人達から言わせると大きな比重を占めているし、その48単位によって取られる時間を、専門のもっと高度の教育を教えたいという意識が非常にあります。

まず国立大学から始まって、教養の人文、社会、自然というのを1単位もしくは2単位にする。語学は逆に増やしたりしたところもありましたが、語学については英語だけではなくて、第2外国語、いわゆる他の外国語を増やし選択必修する。それから体育は必修から外して選択にする。そういう形の大学がすごく増えました。

その時専修大学は教養の先生方が頑張りまして、大学は勿論専門も大事ですけど、リベ

ラル・アーツである、人間の教養として最も根底にある常識的な学問である人文、社会、自然を無くすのはおかしいのではないかと。大学は確かに専門の教育を受ける所ですけど、その専門の教育を受けるのに、ベースにあるリベラル・アーツをきちんと持っていないというのは、上に行けないのと同じである。きちんとした教養も無いのに専門を教育しても何にもならないのではないかと。という意見が非常に強くなっていました。あの時程教養の先生方がまとまって意見を交わし、教授会で発言し、いろんな運動をしたことはありませんでした。

結果として専修大学は、自然、人文、社会、自然はそれぞれ2単位必修。8×3で24単位。それから外国語は8単位必修。ただその時に8単位必修は、必ずしも英語だけではなくて第2外国語を入れるという形でした。これが他の大学とは違うところです。

その時の学長、望月学長は英語だけではなく、他の外国語も大学においては必要である。英語だけ必修にしていたのもおかしいし、それから第2外国語が大学の中で勉強する場があまりないというのもおかしいということで、結果として8単位の英語もしくは第2外語を必修に残しました。

その後体育は4単位ですが、4単位というのは今までは通年で1単位。実技は通年1単位、理論も通年で2単位という形でした。それを半分に削って、半期で1単位、実技は通年やると2単位もらえる。それから保健体育理論は半期で2単位。ということは今までの半分の形で必修4単位残すという形にして、結果としては教養科目を32単位必修として残しました。

これが専修大学の平成3年から平成5年にかけての大綱化の動きです。この時他の大学は同じような動きがありました。文科省はこうや

れという指示は一切しませんでした。

ところがそれぞれの大学はそれぞれの事情があって、教養が一番少なくするのは20単位全部で割るような大学も出てきました。要するに、人文、社会、自然というのを一つずつ取ればいいだろう、それから体育はサービスというか選択にする。第2外国語と語学はその内のいくつかを取れば良い、そういう形で教養だけを極端に減らしました。それでどうしたかというところ、専門科目の中にいろんな形で教養に近い専門を多くするというにし、結果として専門教育を100単位以上取らせるという形の大学がほとんどでした。

いわゆる神田10大学の中で、24単位以下になったところは無いし、だいたい30単位前後が多かったと思います。

そういう流れの中で専修大学の体育は、自分達で単位を半分にして必修に残したという結果、他の大学ではちょっと少ない4単位必修ということはこの学校でやっているわけです。

これがなかなか大変で、体育学部の動きがあって、いろいろな先生が出たり入ったりした時に、ずっと若い専任が入っていなかったのです。15年間若い研究者とか若い先生方を入れないままに体育学部作るということで動いていたのですが、結果としてその人達が全部辞めた後で初めて若い前嶋、野呂と言う先生方を入れて、代替わりしたわけです。

それでこの先生方も結果として35年近く勤めている人達がほとんどで、この10年、今の平成10年当たりから全部代替わりして、ほとんど古い先生方が定年で辞めたわけです。

ところが定年で辞めた後どうなるかは、これからの動きなのですが、それは後でお話します。定年は70ですが、体育の先生というのは以外に70まで勤める人は少なく、大行先生を初め

として、紅林武男先生、それから清水瑞秋先生、野瀬先生、こういう昔の体育の先生方は定年になる前に健康を崩して途中で退職しています。その他の先生は依願退職で、一番早い依願退職の小宮先生は結局順天堂大学へ呼ばれて、最終的には学部長までやった先生もいます。後は、渡部峯生先生は茨城大学へ行って教授をやっていました。

そのような事がいろいろありますが、これを見ていると、専修大学は確実に定年の退職者がどんどん増えています。これからは入ってからずっとやられていく先生がどんどん増えるのではないかと思います。

□大学の使命

今後この大学がどのように発展していくかというのは分かりませんが、今また文科省が大学改革というか、教養を見直すと言い出しました。これは専修大学だけの問題ではありませんが、専修大学は大学の中で委員会を作って、専修大学の教養をどうするかということを始める会議ができました。

大学というのは本来いろんな問題がありますが、専門が主だということは確かです。けれども専門が分かるだけの教養を身に付ける。これがもっとも大事じゃないと言われていました。

今多くの大学で委員会とか、いろいろな学生を世話する団体、場所が出てきています。いわゆる人間、大学の今後はどういうのが一番いいか、やはり結論はなかなかでないのです。

ただ大学といっても大学によって非常にレベルが違う。例えば東大のトップの連中と、専修大学の一番下の方の人は同じ大学生だけれどかなり中身が違うのではないかと。もっともたいして違わないと言えばそれまでですが。

ともかく学校としての教育のレベルというのはずいぶん違います。それを一律にこういうふうにすればいいんだという考えで決めつけることは非常に良くありません。といていろんな大学が行っている指導、就職とか学生援護、奨学金とかそういうのも全て統一化するということは決して良いことではないので、それを大学が選ぶ時にどういう形で選ぶか、要するに学生が基本なのは大学側としては当然なのです。

大学がもつめる学生を作るためにはどういう教育が必要なのか。こういう根本的な理念をなんとか確立しないとそれぞれの大学がどういう教育をしているのか全然分からない。そのところを学生も交えて大学の将来、もっと言えば専修大学はどのような学生を作りたいのか、専修大学の教員はどのような教育をしたいのか、結果としてどこまでもっていけるのかというのを検討するのがこれからの大学の使命です。

□専修大学の使命

130年といて慶応について長い歴史のある専修大学は、けっして慶応と一緒にではありません。なぜかと言うと明治時代、大正にかけて慶応はどんどん大きくなって、その時期から東大、京大、一ツ橋に伍して勉強していたのに対して、専修大学は夜学を中心にして、神田界隈を官庁に勤める人達の勉強する場所として仕事をやってきました。

だからもともと同じにはならないことはいっぱいあるわけです。だけど今専修大学は2万人の学生がいて学部も6学部、来年にはもう一つ増えて7学部、決して大きな大学のうちには入らないけれど、日本の中で学生数2万人を超える大学というのはそんなに無いわけです。学生数2万人もいるのに自分達の学生をど

ういう形で育てたい、どういう方針でどういう夢を持って学生を教育していくかに対しては、残念ですけど大学も教員も何にも今のところビジョンがない。教員はそれをなんとか自分で作るよりしようがない。学生はなんとなく単位数を取れば終わっちゃうんですけど、大学がどういう方向に進むか、今後この大学がどうなっていくのか。

自分のことで恐縮ですが僕はこの来年の3月で定年になります。ここにあるように48年間いたことになるのですが、ずっとこの大学を見てきました。昭和の40年代から50年代、受験者数が4万～5万、他の大学に伍して堂々たる大学になったことがあるのです。

その時にどういうふうに大学をもっていくか、それからどういう学生を育てるかというビジョンを作っておけば、今こんなわけの分からない大学でないはずですよ。その後、他の大学もそうですが目的とか、このように教育したいというのが明確に無いままにきています。

受験生というのは非常に正直ですから、4万～5万あった受験生が今やっと3万を維持している状態です。3万というのは決して多い方ではなく、3万のうち受かるのが5千人ですからそれほどのレベルの大学ではなくなってきています。

一方で明治は、ある時期専修と変わらなかった、専修の方が明治より受講生が多かった時もあるわけです。ところが今明治は受験生10万人を超えました。なぜそうなったか、それなりにやっぱりどこか違うのではないかと。明治の場合は簡単に学生に対して学生のためというのが表面に出ている。それからもう一つ言えば神田でそれなりに学生が勉強をするために非常に大きな施設を造り、今後どんどん神田でそのような場所を造ろうと努力している。それが結

果として受験生が10万人を超えたところがあります。専修大学はまだそれがはっきりしません。何をどうしていいのかももう少しなんらかの形ではっきりさせたほうが良いのではないのでしょうか。

これを言うときちょっと問題になるのですが、社会知性ですが、一生懸命学校は行っていますが僕には未だに社会知性というのが何だか分かりません。受験生でも学生でも社会知性などという言葉より、もっと具体的に見て、読んで勉強して分かる目的もしくはビジョンがあったら、もっと勉強し易いし自分の目的も作りやすいのではないかと考えています。

だからもう少し分かりやすく専修大学の色というか、趣旨を早く打ち出して、専修大学はこういうふう生まれ変わった、こういうふう勉強できる、それで専修大学がこういう学問をやっている、ということを分かり易くすることがこれからの専修大学が一番大事なことだと思います。

□専修大学における体育の意義

専修大学の体育はこういう形で非常に努力した結果として、昭和40年、50年代は文部省の研究会などで発表すると、ここまでやっているのか、ここまで把握して体育の授業をやっているのかと言われるぐらいでした。他の大学が見学にきたり、カリキュラムを教わったり、我々が行っても一緒に研究会をしたり専修大学を見習ったカリキュラムを作っている大学がいっぱいあります。

しかもそれが未だにこのところに来て非常勤講師の数が増えている、増えていると言うことは、授業数が多いのと専任がそれほど多くない、結果として非常勤に頼む部分が多いのです。これは人事に関することですからなかなか

うまくいかないのですが、これから教育がどうなるかわからない。その中で体育のあり方も検討しなければいけない部分がいっぱいあるのですが決して不必要なものではありません。

専修大学が大綱化の時生き残った理由は、体育とは何だと学生にアンケートを採って体育は友達が出来、もう一つ言えば体育の場所ではか教員と話せない。あそこへ行けば楽しい、とそういう授業を体育はずっとやりたと思っていた。現実には今でもやっているつもりです。今若い人にほとんど交替して現在40代を中心に努力している結果として、いろいろな事が出来るようになりました。だけどこの体育を大学がどう考えているかはまた別なのです。ただ言えることは20歳前後の人間の体というのはちょうど成長期の最後なのです。

その成長期にどこまで体力、知力、行動力その他を成長させられるか、これが結局その後高齢化社会で80年～90年生きる人間の中で、レベルを高くしていけたらその後60年なり70年間を自分のレベルを高くしたままずっと生活できるのです。それを何もしないで、体力も使わないで、それから知的な勉強もしないでレベルの低いまま60年、70年生きるかということは大変な差なのです。それで身体活動を中心としているのが体育なのですが、筋力とか行動力とかそれから反射神経とかそういうのを育てる最良の場所なのです。だから20歳の成長期の最後に、自分達のレベルをどこまで持ち上げて大学を終えるかということが非常に大事なことだということで、大綱化は体育の必修を認めたのです。

同じように今でもそれは通じると思います。だからあなた方も今ちょうどその時にいるわけですから自分のレベルを「この程度でいいじゃん！」で終わるのか、もっとより以上の自分を

作っておいて一般社会に出てレベルの高い一生を終わるのか。社会に出てから努力すればいいじゃないかと言うかも知れませんが、社会に出てから自分のレベルを上げるということは、その社会の中でやることはできるのですが、何もない己が自分自身のために自分がレベルを上げることができるのは大学の4年間しかないのです。その時どこまで自分をレベルアップできるかが一生の問題だと思います。

ただ体育の話で終始するつもりでしたが、いろんな話をついでにしたのですが、今1年2年3年の人がいますが、まだここで止まらないで、今後もっと上にあがるような形で大学生活を過ごしてもらいたいというのが、全体的な講義の最終の目的です。少しぐらい分かってくれればいいと思います。これで終わります。

教養特殊講義（平成21年7月2日、814教室にて）

資料1 専修大学正課体育教員名簿

[illegible]